



生活支援コーディネーター
ほんだ ひとし
本田 齊さん

地域おこし 協力隊だより



本市で活動している地域おこし協力隊の中から、今月は農業支援員の鈴木真臣さんと、生活支援コーディネーターの本田齊さんをご紹介します。

地域おこし協力隊に関する
問い合わせは
地域振興課地域振興係
(☎ 26-2276)



農業支援員
すずの まさおみ
鈴木 真臣さん

就農を夢見て深川へ

「就農を夢見てこのまちにやってきました。深川市は北海道の中でも農業が盛んな地域なので、農家同士で仲間意識を持ち互いに高め合いながら農業ができる環境に魅力を感じました」と語ってくれた鈴木さん。鈴木さんは令和2年4月に地域おこし協力隊に着任し、市とJAきたそらち、(株)深川振興公社と共に設立した(株)深川未来ファームで水稲や野菜の栽培、ふかがわポークの製造などに従事しています。

静岡県にある実家が兼業農家の鈴木さんは、幼いころから農業を身近に感じて育ってきました。「いつかは自分で農業をやってみたい」という気持ちがあり、東京でサラリーマンとして働いている間もその気持ちは消えませんでした」と就農への思いが募っていたことを明かしてくれました。

地域の温もりに触れて

本田さんは令和2年9月に地域おこし協力隊として着任し、高齢の方がこれからも健康で長く住み続けられるよう地域で行われる支え合い活動の発展・発信などを担う生活支援コーディネーターとして、深川市社会福祉協議会で働いています。

着任前は東京都でシステム開発の会社を営んでいた本田さん。母と姉夫婦が本市へ移住したことで、自身も年に数回訪れるようになりました。「深川は以前住んでいた地域とは違い、親しい近所付き合いがあり、母は町内会活動やサロンに生き生きと笑顔で参加していました。幸せそうな母の姿を見て安心しましたし、住む方々の温かさを感じました。自分の将来のことも考え、このまちで暮らしながら純粋に人のためになる仕事を送りたい」と第2の暮らし理由を送る拠点として深川を選んだ理由を語ってくれました。

水稲への思いがより強く

昨年は施設野菜の栽培に従事することが多かった鈴木さんですが、着任以前から水稲で就農したいという思いがありました。そこで昨年の秋に水稲に従事したいことを会社に伝えると、今年から同社が始めた納内地区での水稲を栽培する3人のメンバーに選ばれました。

「3人とも水稲の経験がほとんどなかったので不安な思いもありましたが、指導してくれる方にも助けられながら、就農に向けた知識や技術を身に付けるため、情報を共有し合って作業に取り組みました」と語ってくれた鈴木さんの表情は充実感に満ちていました。農家へ出向いて作業を手伝う機会があれば、ほ場の雑草や水の管理状態などを参考にし、自分たちでも取り入れられそうなものは試験的に試してみるなど、夢の実現に向けて意識も変化した1年間になったようです。

水稲の栽培を終えた鈴木さんは「ピニールハウスの室温管理や田植え後の水の管理など、さまざまな作業を1日も欠かさず続けることは大変でしたが、収穫後の作物がなくなったほ場を見て、大きな達成感を味わうことができ、水稲で就農したい思いがさらに強くなりました。来年は、より経験を積み、夢に近づいていきます」と力強く話してくれました。

人や地域をつなげるために

協力隊着任後から本田さんは、高齢の方の自宅や地域で行われるサロンなどへの訪問に加え、地域の方と触れ合う機会が多い町内会長や民生委員からの情報収集にも努め、みなさんが生活を送る上で抱える不安や工夫していることなどを積極的に聞き出してきました。その情報をもとに、困っている方への助言や地域で行う介護予防活動を進めてきました。「とにかく地域の方とつながり、信頼関係を築き上げることを目標に飛び回り続けました。困っている方への解決策を直接導き出すことは難しいですが、みなさんが徐々に自分から相談してくれたり、困りごとを抱える方を紹介してくれたり、そして何よりも笑顔で話してくれるようになったことにやりがいを感じています」と約1年間の活動を振り返ります。

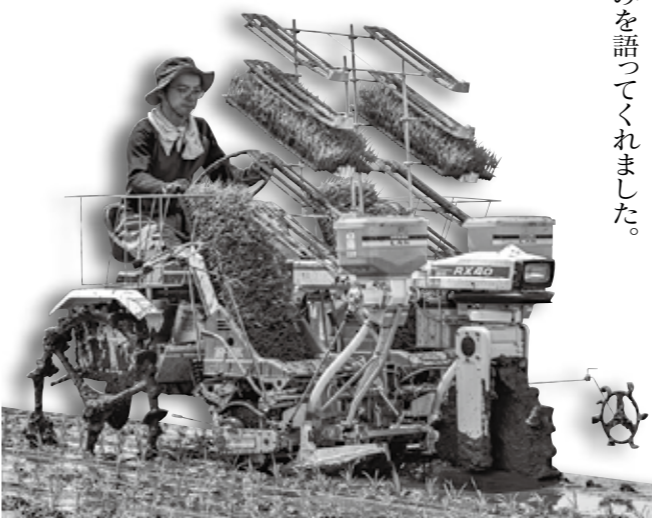
今年の10月に生活支援協議会が主催した地域フォーラムで、地域の活動の様子を動画で紹介した本田さんは「高齢の方は、動画の方が音と映像の力でより理解しやすいと思いいました。また、桜山レジャーランドが開園した当時の映像など、懐かしさを感じてもらえる素材も探して上映したところ、みなさんに喜んでもらうことができました」と何をすることも相手の心に寄り添って活動することを大切にしているようです。



鈴木さんが制作したチラシ

自分のできる地域おこしを

鈴木さんは、農作業がない冬季期間は、農畜産物処理加工施設でふかがわポークの製造などに取り組んでおり、昨年はPR用のチラシの刷新も担当しました。「学生時代や前職でデザインを学んだ経験があり、深川市のPRに直接つながる仕事なので、挑戦しました。今後も自分のできることに取り組み、深川市を盛り上げていきたいです」と協力隊としての意気込みを語ってくれました。



▼本田さんが自ら考案したキャッチコピーと活動の様子

ひとのために とびまわろしんせつなひと



今の活動を宝物に

本田さんはこの1年間の活動で、高齢の方の自宅を200件以上訪れました。周囲の方からは驚かれるようですが、本田さんは「もともと多くの方とつながる必要があると思っています。これまで取り組んできた活動をより充実させ、もっと簡単に訪問できる環境づくりを進めていきたいです」と今後の展望を語ってくれました。任期を終えた後の予定を伺うと「早いうちに自分自身も高齢者の仲間入りです。何をするかは決まっていますが、この活動が退任後に宝物となるように今は頑張るだけです」と現在の活動に向き合う思いを明かしてくれました。